原著論文

呉昌碩の行書における篆書由来の字形

瀬筒寛之*

（二〇二二年十一月十六日　受理）

On the Character Forms Derived from Seal Script in Wu Changshuo's Running Script

SEZUTSU Hiroyuki

要約

本稿は、呉昌碩の行書に見える篆書由来の字形について考察するものである。行書に見える篆書由来の字形とは、篆書の骨格を備えながら点画に連続性を加味し、行書的に書かれた字形のことである。

一では、呉昌碩の四十代から六十代の画賛、書軸および詩稿に見える篆書由来の行書字形を取り上げ、各年代において篆書由来の行書字形を確認し、考察した。通常の行書体の中に篆書由来の字形が混在することは、文字の調和の点で疑問が残る。しかし、数十に及ぶ篆書由来の行書字例を見ると、呉昌碩の学書経験や金石等の実見によって得られた学識が、用字選択、書体選択における背景に垣間見え、呉昌碩の文字の歴史に対する造詣の深さを物語る一査証と考えられるものである。

また二では、『呉昌碩書法字典』（松清秀仙編、二玄社、一九八四年）から表一「呉昌碩の篆書由来の行書字形」を作成し、呉昌碩の行書に八十余種の篆書由来の字形が見られることを明らかにした。

キーワード：呉昌碩、行書、行意、篆書、字形

はじめに

呉昌碩〈道光二十四年（一八四四）～民国十六年（一九二七）〉は、清末から民国にかけて詩・書・画・篆刻の四芸をよくし、独自の芸術世界を開いた清朝最後の文人と評される。日下部鳴鶴、河井荃廬をはじめとする日本人芸術家たちとも交流し、日本の芸術界に及ぼした影響は絶大である。呉昌碩芸術の研究は様々に行われてきているが、本稿ではさらに新たな視点からその書法および用字に見られる事象に光を当て、その独自性の一端を明らかにしたい。

先ず、稿末の参考文献に挙げた先学の研究を参考に、呉昌碩における四芸との関わりの概略を辿っておきたい。

呉昌碩は、浙江省安吉に誕生し、名を俊または俊卿、字を蒼石・倉碩といった。昌石・昌碩・苦鉄・缶廬・大聾などの別号を用いたが、民国元年六十九歳の時、名を昌碩に改めた。四芸中、特に篆刻と書の評価が高いといわれる。その素養を深める上での端緒は、金石・篆刻に造詣の深かった父・甲辛の導きによるものである。また二十九歳のとき杭州・蘇州・上海を歴訪、遊学を開始し、金石への興味や画家としての親交を深めた。杭州では二年間、俞樾に文字訓詁などを学び、蘇州では金石収蔵家として名のあった呉雲（一八一

* 鹿児島大学　法文教育学域　教育学系　講師

一～一八八三）や呉大澂（一八五三～一九〇二）等と出会い、金石資料の精粋を実見する機会に恵まれるなど恩恵をうけた。また楊峴山から書と詩文の教えを受け、師弟の礼をとった。さらに上海の壬伯年ら海上派の画家と出会い、画の才能が開かれることとなる。呉昌碩は自らの芸術を「篆刻第一、書第二、画第三」と評した。

呉昌碩の書、なかでも篆書と行草について、小林斗盦（一九七七）は次のように述べている。

> 本来均整であるべき偏と旁をずらせて、思い切って肩上がりにし、対応の面白さに石鼓を構成し直している。運筆も速く動勢を与え、篆書の行草化に成功したのである。
>
> （中略）
>
> 王鐸に米元章を併習したという行草は、篆籀の書法を溶鑪して渾穆な連綿体となる。筆勢は奔馳して雄偉、呉翁の行草ファンの随喜するところであるが、概して小字の題跋にその特徴を発揮する。[1]
>
> （傍線は筆者による。）

前半は「篆書の行草化」について、後半は、いわば「行草の篆書（法）化」について述べており、篆書法と行草法が相互に作用して呉昌碩独自の境地に至ったものと考えられる。後半の「行草の篆書（法）化」に関してはこれまで、篆書法（中鋒）をもって書かれた行草の強靭な線質についての指摘は多くなされてきた。しかし実は、行草における篆書法（中鋒）の影響は線質のみに留まらず、篆書の字形そのままに行意を加味して書いた字例が散見されるのである。

本稿は、呉昌碩が書いた篆書由来の行書字形に焦点を当て、新たな視点から氏の金石・篆書に対する造詣の深さの一端を示すことが目的である。呉昌碩の遺した文字資料には書軸、画賛、尺牘、信片、詩稿などがあるが、今回先ずは篆書由来の字形が散見された画賛、書軸、詩稿の一部に注目した。

一　呉昌碩の行書における篆書由来の字形

（一）画賛について

呉昌碩の画と賛は、清朝最後の文人と評される氏の詩・書・画・篆刻の四芸が同一紙面上に凝縮された、いわば氏渾身の芸術表現と言えるものであろう。画と賛は、各々に独自性があり魅力的だが、両者の秀逸な調和は金石の気の表出をさらに高め、人々を魅了してやまない。画題、賛の文意、ひいては賛の章法、用字、字体等の全てに、彼の学識や嗜好、芸術的な感性が反映されていよう。ここでは、『呉昌碩作品集（続編）』（王辛大主編、西冷印社出版社、一九九四年）に掲載の画賛に見える篆書由来の行書字形を挙げる。通し番号の丸付き数字の下に示した図版の釈文の傍線部は、図版の文字が篆書由来の行書字形であることを表し、それらについて後に簡単な考察を述べた。また（　）内には図版の出典資料における番号と画題を記し、制作年齢が明らかなものはそれを付した。

①「爵觚槃簋鼎彝鐘」（七　墨竹）

古代祭器の各種類名を列挙している部分である。二字目の「觚」

は、「角」を篆書的に「肉」形に書いている。四字目の「簋」は全体を金文の「[illegible]」字形、五字目の「鼎」も金文の「[illegible]」字形に書いており、その他の祭器名の行書とは明らかに異質である。一見不調和にも見えるが、線条化された行書の中にあって、それらの象形的な字形はユニークな印象を与える。呉昌碩には、賛の全てを篆書で書いた作もある。

②「三年敦画梅」（一三二　墨梅　四十七歳）

二字目の「秊」は「年」の古字形で、小篆の「[illegible]」や隷書の「[illegible]」由来の字形である。三字目の「敦」は、「教」の左上部に声符の「臼」を加えた字形で、春秋末から戦国初期の金文である中山王鼎に見える「[illegible]」の字形である。

③「蘭弟子瀟湘烟雨」（一七　叢蘭）

最後の「雨」は左右に三点を書いている。左右に三点以上を有する「雨」は、管見では甲骨文、金文にも見られないものである。説文古文の字形は「[illegible]」で三点を四列に打ち、下には四縦画も有して特に複雑な字形だが、これに通ずるところがある。呉昌碩は生涯にわたり、統一前秦国の籀文の代表と言われる石鼓文を臨書したが、さらには秦以外の六国の文字とされる古文にも通じていたことを示す一例と言えるのか、実に興味深い。他の字例についても注意が必要である。

④「初平老友先生」（二八　牡丹）

四字目の「友」の字源は「又又」と、二又に従う形である。その文字の成り立ちを踏まえた字形を書いたものと考えられる。

⑤「二十有四年歳」（三六　墨梅　五十五歳作）

三字目の「有」は、「又」と「月」とに従う文字であり、金文の「[illegible]」に近い形で書かれている。ただ上部真ん中の長い横画がほとんど右に出ない書き方であり、次画への行意が強く出ていると感じられる。また四字目の「四」は、説文古文の字形「[illegible]」で書いている。③で取り上げた「雨」も古文の字形であった。因みに呉昌碩は、四を「[illegible]」（行書）、「[illegible]」（草書）、「[illegible]」（隷書）、「[illegible]」（篆書）など、適宜様々に書いている。また、「[illegible]」（王鐸）、「[illegible]」（何紹基）、「[illegible]」（阮元）などに、先に中の左右二点を書き、右回転で大回りする書き方が見られるが、呉昌碩の「[illegible]」のように一点で回転する書き方は他に見られず、特殊な書き方と言える。

⑥「巳亥展重陽日」（三七　叢菊　五十六歳作）

三字目の「展」は、「尸」、四工（音：テン）、「衣」に従っており、小篆「[illegible]」の中央の四工部分を残した字形で書かれている。

⑦「申江潮満月明時」（四五　幽蘭靈石　五十八歳作）

一字目の「申」は「神」の初文で、電光の走る形が字源（[illegible]：甲骨）とされる。右図の字形は、説文篆文「[illegible]」に近似している。

⑧「花寫照是長技霞高」（五五　大石紅梅　六十歳作）

五字目の「長」は、前後の字形と明らかに書体が異なり、金文「[illegible]」と説文篆文「[illegible]」の中間に位置するような字形である。やや右上がりの字形であり、篆書字形でありながら行意が感じられる。

⑨「逐蛟虬舞本大力」（同⑧）

四字目の「舞」に関しては、金文に匽候舞易器の「[illegible]」があり、説文篆文は「[illegible]」、隷書に西嶽華山廟碑の「[illegible]」がある。右図「舞」の上部は、隷書形を右上がりにしたような字形である。また下部の「舛」は、説文篆文の左右対称の形に行意が加わり、右上がりの楕円形をしている。

⑩「得燕支盡」（同⑧）

二字目の「燕」は、燕の飛ぶ形を象ったものであり、下部が現在の「灬」ではなく篆書の「火」形に書かれている。説文篆文「[illegible]」の字形に行意を加え、右上がりになっている。この他、呉昌碩が「灬」を「火」に書いている字例は、「熟」、「熱」などがある。

⑪「東王父與西王母」（壽桃　六十二歳作）

「父」の金文は「[illegible]」、説文篆文は「[illegible]」で、「斧」と「又（手）」とに従う。右図三字目の「父」は、金文と説文篆文の中

間に位置するような字形といえる。一方、「父」の四字下に「母」があるが、その字形は金文「母・母」や説文篆文「母」の字形ではなく、通常の行書字形である。「父」と「母」は対の関係性にある文字同士だが、その筆記にあたっての書体選択には違いが見られるのである。

（二）書軸について

次に書軸について、詩句本文や為書・落款の中から篆書由来の行書字形を抽出し、その字形について考察する。左掲図版①～⑦は、稿末の図版出典資料ⅲより、⑧～⑨は同ⅳより抜粋した。

①「文字即請正之」（一五七　篆書七言聯　為書）

「文」の、金文は「文」、説文篆文は「文」である。右図一字目の「文」は、初義を伝える象形的要素を残す金文の字形を行意で書いている。「正」の金文は「正」、説文篆文は「正」である。右図五字目の「正」は、説文篆文の字形と近似した字形である。

②「堅冰破船腹白浪」（一五九　行書屏（之四）　詩句）

「冰」（＝氷）の本字は「人人」で、金文は「人人」、説文篆文は「人人」である。右図二字目の「人人」は草卒に書かれ、金文の字形に近似している。

③「荒山野水破茅屋」（一六〇　行書七言聯　詩句）

「荒」は、金文に「荒」が見え、説文篆文は「荒」である。右図一字目の「荒」は、説文篆文の字形に近似している。「茅」は、金文に「茅」が見え、説文篆文は「茅」である。右図六字目の「茅」は、上部は金文の字形に近く、下部の左下へ向かう斜画は説文篆文に見られる筆画である。

④「商盤夏鼎周尊彝」（同③　詩句）

「夏」は、金文に「夏」が見え、説文篆文は「夏」である。右図三字目の「夏」はほぼ、説文篆文の横画をやや右上がりにした字形である。「鼎」は、金文に「鼎」が見え、説文篆文は「鼎」である。右図四字目の「鼎」と（一）の①に掲出した「鼎」とはやや字形が異なっている。右図の「鼎」は、下部が四点に省略されている。

⑤「魚|如矢執古道」（一六一　行書六言聯　詩句）

「魚」は、金文に「」が見え、説文篆文は「」である。右図一字目の「魚」は、説文篆文の中央の「肉」形の部分が「田」形となっている他は、説文篆文の字形を右上がりの動勢を加えて書いた形である。

⑥「先生屬集|猟碣字」（一六四　篆書七言聯　為書）

「集」は、金文に「」などが見え、説文篆文は「」である。金文の二字例目や説文篆文は、やや象形的な要素の残る三隹に従う形である。右図四字目の「集」は、説文篆文の字形を行意を加味してやや右上がりに書いたものと言える。

⑦「壽逢浩劫眉|應皺」（一七〇　壽中堂　七十六歳作　為書）

「眉」は、金文に「」が見え、説文篆文は「」である。右図五字目の「眉」は、まさに説文篆文の字形に行意を加えて書いたことが分かる。

⑧「醜奴闇主|法家屬瑑」（臨石鼓文34　為書）

「主」は、金文に「」が見え、説文篆文は「」である。右図四字目の「主」は、説文篆文の二字例目の形を行意で書いたものである。

⑨「時丁巳閏華|朝」（篆書七言聯71　為書）

「華」は、金文に「」が見え、説文篆文は「」である。右図五字目の「華」は、説文篆文の字形に連続、筆勢、右上がりなどの行意を強く加えて書いたことが顕著な例である。

（三）詩稿について

最後に、詩稿に見える篆書由来の行書字例を、稿末の図版出典資料vより抜粋する。呉昌碩は膨大な詩稿を遺しており、詳細な検討は別稿に譲らねばならないが、ここではとりわけ目を引く「攀」字の一例を挙げる。

①「讎病謝躋攀|」

「攀」の説文篆文は「 、 」の二字があり、この二字目は一字目の右下部のみの字形であることが分かる。段玉裁の注には「 、古の攀の字」とある。つまり「 」は「 」の古字であり、右図五字目の形は、この古字を連続の行意を加えて書いたものである。呉昌碩は、他の画賛などには「攀」の字画のままの行書体も書いており、字画の少ない古字と字画の多い繁体とを適宜使い分けている。

二　表一「呉昌碩の篆書由来の行書字形」（後掲）について

後掲の表一は、松清秀仙編『呉昌碩書法字典』（稿末図版出典資料ⅰ）から篆書由来の行書字例およびそれに対応する篆書八十三例を抜粋したものである。基本的に篆書、行書ともに呉昌碩の字例を摘採したが、呉昌碩の篆書体が見えない文字については説文篆文を補い、文字の下に「説文」と記載した。表一には、前項一で取り上げた字例も掲出している。以下、一部の文字について考察を述べる。

○表一－18「射」― （呉昌碩篆書）、（篆書由来の行書）

呉昌碩篆書「 」は弓と又とに従い、籀文の代表とされる石鼓文「」を臨書したものである。呉昌碩の篆書由来の行書「」は、同じく弓と又とに従い、石鼓文の字形の構成要素を行書になおした字形をしており、篆書と行書の字形解釈に一貫性が見られる。一方、説文篆文「 」は、身と又とに従う字形である。これについて白川静氏の『字統』では、―初形は弓矢と手とに従う。弓に矢をつがえて、これを放つ形。いま弓矢の形を身と誤り解釈して、その形義を得がたいものとなった。すでに金文の字形に「身矢」のように誤ったものがある。〔説文〕五下に「弓弩、身より発して、遠きに中るなり。矢に従ひ身に従ふ」とするのは、誤った字形によって説くものである。―として、金文の一部および説文の字形・字義解釈が誤りであることを指摘している。

○表一－26「徳」― （呉昌碩篆書）、（篆書由来の行書）

「徳」は金文に「 、」、盟書に「 」が見え、説文篆文は「」である。呉昌碩篆書「 」は説文篆文「」に近似しており、呉昌碩の篆書由来の行書「 」は盟書「 」の字形要素に近いと言えよう。

○表一－44「殺」― （説文篆文）、 （篆書由来の行書）

呉昌碩の篆書由来の行書「 」（煞）は「殺」の異体で、急と攴とに従う字である。[2]

○表一－80「養」― （呉昌碩篆書）、 （篆書由来の行書）

「養」の金文は「 」で羊と攵とに従い、説文篆文は「 」で羊と食とに従っている。呉昌碩の篆書由来の行書の一字目「 」は金文「 」の流れを汲む字形だが、同二字目の「 」は説文篆文「 」の流れによる字形であることが分かる。特筆すべきは、呉昌碩は、文字構成要素の異なる金文および説文篆文の字形をよく理解し、それらの両方を行書化して適宜使用しているということであろう。

その他、表一を見ると、ほとんどの行書字形が、篆書字形に酷似

した形のままに、筆脈の連続、右上がりなどの行意を加えて書かれていることがわかる。一、二を通して呉昌碩の行書に多くの篆書由来の字形が見られることを明らかにした。これらの様相は、字源の正統な流れを意識しているように感じられ、呉昌碩の文字の歴史に対する造詣の深さを物語る査証と言えるのではないか。

一では、呉昌碩の四十代から六十代の画賛、書軸および詩稿に見える篆書由来の行書字例の一部を取り上げた。ここに見るいずれの年代においても篆書由来の行書字形を確認することができる。通常の行書体の中に篆書由来の字形が混在することは、文字の調和の点で疑問が残る。しかし、一で挙げた二十余種の篆書由来の行書字列を見るに、呉昌碩の学書経験や金石等の実見によって得られた学識が、用字選択、書体選択における背景に垣間見える。さらに、呉昌碩の生涯に渉って同様の字例を検討すべきだが、本稿を初探として、また稿を改めたい。

おわりに

今後の課題としては、次のようなことが挙げられる。本稿表一に、『呉昌碩書法字典』の三五〇〇字程の首文（親字）のうち、篆書由来の行書字形例として八十三例を挙げた。総首文（親字）における比率は二・四％である。呉昌碩は、この比率が、同時代やその前後の書家に比して高いのではないかと推測している。今後、王鐸、傅山、趙之謙などを中心に同様の字例収集を行い、篆書由来の行書字形の様相が、より呉昌碩に特徴的な傾向と言えるのか検証する。そしてそれらを通して、書作における呉昌碩と他の書家との共通点や相違点の新たな一面を明らかにしたい。

図版出典

本稿中の文字図版は、次の書籍から抜粋、転載した。

i　松清秀仙編『呉昌碩書法字典』二玄社　一九八四年
ii　藤原鶴来『新書道字典』一九八五年　二玄社
iii　王辛大主編『呉昌碩作品集（続編）』西冷印社出版　一九九四年
iv　謙慎書道会編『呉昌碩のすべて』二玄社　一九七七年
v　童辰翃責任編輯『缶廬翰墨』上海書店出版社　一九九五年

参考文献

・東京国立博物館・台東区立書道博物館『呉昌碩の書・画・印』二〇一一年
・林田芳園・福本雅一『書学大系　碑法帖篇　第四十八巻　呉昌碩行草書』同朋舎出版　一九八九年
・白川静『字統』平凡社　一九八四年

注

[1] 小林斗盦「呉缶翁の芸術」（『呉昌碩のすべて』謙慎書道会編　一九七七年　一二五頁）
[2] 白川静『字統』（平凡社　一九八四年　三四九頁）

表一　呉昌碩の篆書由来の行書字形

番号	首文	呉昌碩篆書	篆書由来の行書
1	不		
2	中		
3	之		
4	乘	説文	
5	事	説文	
6	以		
7	函	説文	
8	則		
9	去		
10	四	説文	
11	圃		
12	執		
13	夏		
14	夢		
15	官		
16	家		
17	實		
18	射		
19	専		
20	導		
21	年		
22	形		
23	彫		
24	徒		
25	微		
26	徳		
27	忙	説文	
28	惜	説文	
29	愛		
30	憐		
31	抱		
32	攀	説文	
33	教		
34	昔		
35	晴	説文	
36	暢		
37	有		
38	望		
39	朝		
40	柞		
41	栗		
42	棄	説文	
43	樹		
44	殺	説文	
45	流		
46	漁		
47	漫		
48	灰	説文	
49	無		
50	熱	説文	
51	燕	説文	
52	父		
53	獣		
54	申		
55	眉	説文	
56	秋		
57	窗	説文	
58	糊		
59	缶		
60	耕		
61	育		
62	舞		
63	莫		
64	華		
65	行		
66	角		
67	觚		
68	買	説文	
69	迪		
70	逢		
71	遑	説文	
72	邊		
73	野		
74	長		
75	集		
76	雪		
77	雷		
78	静	説文	
79	顔	説文	
80	養		
81	魚		
82	黄		
83	點		